

クラブライフの提案

「東京レジャーライフクラブ」

目次

【Ⅰ】沿革 東京・杉並生まれのリゾートクラブ

- 01 信販会社がなぜリゾートクラブ？ 杉並の土地柄
- 02 東京信販 vs 日本信販 ゴルフ 場を持たないゴルフクラブ

【Ⅱ】ホテル伊東パウエルの誕生

- 03 伊東でのホテルコンドミニアム建設、狂乱物価のさなか、絶妙な用地確保
- 04 誇れる眺望と温泉 安全第一の海岸管理 月の鑑賞！
- 05 川奈ゴルフと135号線海寄りの開発用地 大倉商事の破たんと維持できなかった「川奈」
- 06 大倉でも川奈の維持に失敗 番外・日本リゾートクラブ協会前史

【Ⅲ】箱根パウエルの買収と展開

- 07 佐々木亨の登場、湖尻富士見荘の買収
- 08 静寂な「たたずまい」と豊田総支配人 12月の箱根の気温
- 09 滞在のイニシャルコスト 春眠暁を覚えず クルマ運転なしでも行ける「贅沢」
- 10 閑散期にクルマなし滞在
- 11 全山「擬似洋風」、温泉自慢 大涌谷噴火騒動 閑散期のクラブ会員感謝月間

【Ⅳ】90年バブルと資産デフレ

- 12 バブルの大波 予想外の資産下落と預託金返還 寄付を募って露天風呂
- 13 民事再生法適用 会員の事業継続要望 再生法手続き終結 大底を打った？

【Ⅴ】ホテル伊東パウエルの近況

- 14 湯治と静養・人気の新井総支配人 避寒・伊東と東京気温比較 仕事場として活用
- 15 伊東パウエルからの観光地 散歩の範囲 伊東市郊外50Km圏 寒冷地と伊東

東京レジャーライフクラブ (TLC) 東京信用販売

【沿革】

* 信販事業とは？ 信販会社がなぜリゾートクラブ？

「東京レジャーライフクラブ」の宿泊施設「伊東パウエル」「箱根ハウエル」の事業主体は、東京信用販売（株）である。同社は昭和 28 年に創立された。

昭和 25 年から始まった朝鮮動乱が終結し、特需がなくなって不況を迎えるが、終戦後 8 年を経過し復興は著しかった。需要が旺盛で、分割払いで買い物する客が増えてきた。割賦（かつぷ）販売が転じて信用販売と称した。こうした時代に、協同組合であった東京・杉並専門店会が業態を変換して設立されたのが、東京信用販売（株）（以下、東京信販）である。佐々木甫（はじめ）は、このとき、中心的な役割を果たした。

割賦販売には、お店がお客に販売した場合に、お店がお客の割賦代金を回収する方式（直接方式）のほかに、お店のお客に対する割賦代金の請求権を信販会社が買い取る方式（間接方式）がある。信販事業を営むには、通産省（現経済産業省）への登録や許認可を必要とした。東京信販の登録は、日本信販よりも早く、業界で 2 番目とか 3 番目と言われている。

専門店会の構成員であるお店から見れば、お店の資金繰りを楽にするという意味で、信販会社の役割は重要であった。信販会社は加盟店を拡大しようとした。

お店も信販会社の看板を掲げる以上の義務はないので、これでお客に買い物をして頂けるならと、気軽に信販会社の加盟店になった。東京信販は地元の杉並地区のお店のほかに、城西地区をはじめ、蒲田や江戸川の専門店会に働きかけた。ピーク時の加盟店は 3,000 店以上になった。

1 万円以上のお客の買い物で、分割払いの回数が 5 回以上になる場合、信販会社はお客から手数料を取るとともに、また加盟店からも、即時に代金を回収する見返りとして手数料をとった。

（注）この手数料が金利なのかどうかは、銀行法が適用されるかどうかの問題につながった。

* 杉並の土地柄・・・明治維新以降一貫して成長

東京郊外の一住宅地ではあるのだが、これを軽く見てはならない。2016 年の杉並区の人口は 55 万人。金沢や長崎よりも多い。それだけではない。市町村民税所得割の納税義務者数と所得割額を 23 区別に集計し比較すると、杉並区（平成 25 年度）、23 区のなかで 10 位（553 億円・10.2 万円 / 人）である。ちなみに金沢市は 5.5 万円 / 人、長崎市は 4.2 万円 / 人である。

出典：<http://www.jichitai-ranking.jp/>

江戸が江戸であったのはせいぜい四谷か新宿まで。その先は田舎であった。日本橋を起点にして甲州街道の最初の宿場は高井戸。東海道の品川に比べ、上り坂があり、遠く不便なので、浅草の有力商人が幕府の許可を得て、新規に開場した宿場を「新宿」と名付けた。

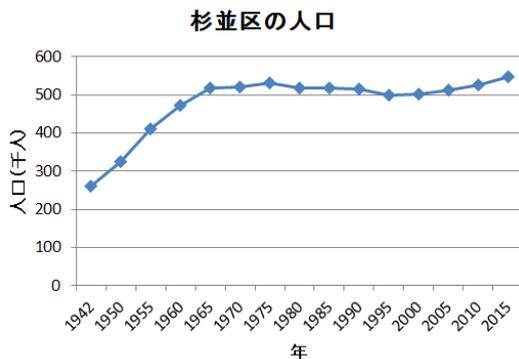
幕末の「旧高旧領取調帳」によれば、荻窪村の一部や阿佐ヶ谷村は日枝神社領。江戸時代の武蔵野の 27 か村で獲れた米がすべて 7140 石である。

「旧高旧領取調帳」の出典：<https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/searchrd.pl>

すでに幕末の頃には、台地の割には灌漑が上手くいっていたのであろう。これらが集まって現在の杉並区が出来たことになる。

杉並はもともと地名ではなく、いわれは甲州街道の杉並木にある。大正初期で2万人程度という。1923年（大正12年）の関東大震災を期に、下町から郊外に住まいを移動、武蔵野の人口も増加する。震災時工事中だった東京駅前の旧丸ビルは、東京の民間企業にサラリーマンが登場した象徴だった。万世橋止まりの中央線は1919（大正8）年に東京駅に延伸、中野 - 吉祥寺間も電化され、1922（大正11）年、現JRの阿佐ヶ谷駅が開業、ともかく都心に向けて電車が走り、通勤可能な状態になった。

この中央線は、当時の他の私鉄と異なり、乗り換えなしで東京駅まで（山手線の内側まで）行けるといいう「特権」をもっていた。



この地域の人口の急増に対応するため、中央線の長距離列車の始発駅は、飯田橋から新宿に移り、従来の列車の路線に電車が走る。その昭和8年には御茶ノ水と中野の間に急行電車が登場した。

それでも、昭和初期の杉並はまだ余裕があった。入澤達吉（大正天皇の侍医）が荻窪に別荘（後・近衛文麿の荻外荘、2013年度に31億円余で杉並区が買収、現・国指定史跡）を建てる。1942（昭和17）年の人口は26万人。

右の画像は、昭和28年 ビザンチンスタイルのアーチ照明完成したときの写真である。

街路に進入禁止のサインがあるが、当時の新聞には、「車馬止め人専用道路に」という解説があった。

このサイトには、東京の郊外商店街の発展を示す、興味深い写真が相当量開示されている。

戦時疎開で一時減少するも、1963（昭和38）年に50万人台に到達。その戦後復興と高度経済成長のさなかの杉並商店会の構成員にリゾートクラブ事業を構想した人物がいたのである。そして1961年（昭和36）年、営団地下鉄が高円寺南駅を開業、1967（昭和41）年、総武線が中野から三鷹まで延長、高架複々線化が完了、現在の姿に近いた。

いま見れば、佐々木の信販事業は杉並の人口急増期の渦中で始まり、また、会員制事業は人口増加の安定期の入口で構想していたことになる。

上掲画像の出典：「パールセンター商店街 歴史資料」

<http://www.asagaya.or.jp/archives/archives.html>



* 東京信販 VS 日本信販

信販会社は、加盟店を通じて、来店するお客に「クーポン券」を持たせるようになった。お客は加盟店にクーポンを提示すれば割賦で買い物ができた。ここで審査が甘くなった事は否めない。

また、分割払いの買い物は大手の百貨店にとっても魅力であった。百貨店の分割払いの請求権を買い取る信販業者が登場した。これが後発の日本信販である。クーポンは専門店だけでなく、競合する百貨店でも使え

るようになると、専門店会はクーポンの規制を働きかけるようになった。この働きかけが実って昭和 34 年に割賦販売を規制する通達が出される。

例えば百貨店と共同利用できるクーポンの禁止、一定金額以下の割賦販売を禁止する等を内容とした(これを昭和 34 年通達と呼んでいる)。

これによって日本信販は、一時、業績を低下するが、昭和 38 年に全国どこでも分割払いの買い物ができる「ショッピングクレジット」を提供した。一方、杉並専門店会に由来する東京信販は百貨店との取引に消極的であった。

売店における信用販売は、その後、電気製品や自動車会社の参入を促し、また、クレジットカードの時代を迎えて、デジタル化、グローバル化、交通や情報処理等の異業種の参入などの影響をまともに受けて競争が激化した。また、多重債務問題や高額割賦商品をめぐるトラブル、個人情報保護など様々な問題を含み、今日を迎えていることは周知の通りである。

下の表は、日本信販(現・三菱 UFJ ニコス)と丸井の戦後復興・高度成長期の足跡を略述したものである。

	日本信販	丸井
昭和35年10月		丸井運輸株式会社(現 株式会社ムービング)を設立。
昭和16年7月		戦時体制下の商業活動規制により、全店舗を一時閉鎖して休業。
昭和21年8月		旧中野本店近くに仮店舗を開設し、家具小売店として営業を再開。
昭和25年12月		割賦販売を再開。
昭和26年6月	東京都文京区本郷に資本金1,000万円をもって日本信用販売株式会社を設立	
昭和26年6月	間接割賦販売業務(クーポン制度)を開始	
昭和33年8月	東京店頭市場に株式を公開	
昭和34年8月		株式会社丸井広告事業社(現 株式会社エイムクリエイツ)を設立。
昭和35年1月		「月賦」の呼称を「クレジット」に変え、企業の体質改善と近代化を推進。
昭和36年10月	東京証券取引所市場第二部に上場	
昭和36年4月	東京都信用金庫協会と提携し、本格的に消費者金融業務を開始	
昭和37年9月		新宿店(現 丸井新宿東口ビル)を開設。
昭和38年10月	ショッピングクレジット業務(個品あっせん)を開始	
昭和38年4月		東京証券取引所市場第二部に株式を上場。
昭和40年6月		東京証券取引所市場第一部銘柄に指定。
昭和41年10月	クレジットカード業務(総合あっせん)を開始	
昭和41年5月	商号を日本信販株式会社に変更	
昭和41年8月		コンピューターを導入。
昭和45年2月	東京証券取引所の市場第一部銘柄に指定	
昭和49年5月		ニュー新宿店(現 新宿マルイ本館)を開設。
昭和49年4月		POSを導入、同時にオンライン信用照会システムを稼働させ、契約業務の簡素化を推進。
昭和50年9月		クレジット・カード「赤いカード」の店頭即時発行システムをスタートし、全顧客カード化を推進。
昭和59年8月	「日本信販・郵便貯金ジョイントカード」発行	
昭和61年10月	「VISA・郵便貯金ジョイントカード」発行	

出典：有価証券報告書

丸井の発祥は、杉並の隣の中野である。中野に由来は武蔵野台地の真ん中をイメージする。関東大震災後の人口増加は杉並以上に顕著であった。戦後の信販事業、割賦販売事業の成長ぶりが偲ばれる。

しかし、日本信販(メインは三和銀行)は 90 年バブル崩壊の余波で不動産への過剰投資がたたり、また、三和銀行も三菱銀行と合併したこともあって、2005 年 UFJ カードと合併、さらに 2007 年ディーシーカードと合併、三菱 UFJ ニコスとして現在の姿になったことは記憶に新しい。

一方、丸井は売上の長期的減少に耐えながら、利益を確保し、業種を小売りから金融に転換しサバイバルを図る。

*** 信用販売をめぐるコミュニティの形成**

さて、話を当時に戻すこととしよう。お客の買い物代金の請求権をお店から買い取った信販会社は、顧客から買い物代金を回収しなければならない。

この作業は、信販会社の際は自ら行うものとは限らず、地域に幹事役を定めてこの幹事役を中心にして回収作業を進めた。このようにして、信用販売事業は、お店の経営者、回収のための地域の幹事役、お店の得意客を構成員とする、独自のコミュニティを形成していった。

*** ゴルフ場を持たないゴルフクラブ**

昭和44年に、東京信販ナショナルゴルフクラブ（TNGC）を発足した。会員数は一時期3000名を超えた。大卒初任給が3万円の頃である。日本の経済成長には、ゴルフという富裕層のスポーツを大衆化する勢いがあった。

ゴルフ場事業というのは、好まざるとにかかわらず、低い資産回転率と戦わなければならない。一日当たりのプレーヤーは200名。年間に5万人の来場があり、1人に2万円消費して頂いても、売り上げは10億円にしかならない。そこで1口2,000万円とし、1千口集めれば200億円の資金ができる。

会員権価格が常時2,000万円以上であれば、預託金は無利子・無担保そして無期限という便利な負債になり、この事業は継続する。しかし、会員権価格が預託金を下回ると、預託金返還要求が出てきて資金繰りが破綻する。会社更生法や民事再生法により債務免除で預託金の呪縛から解放されれば、後は年間収益10億円で経営することを考えればよい。

要するに、通常の預託金制ゴルフ場はプレーヤーが欲しい。そこで、ゴルフ場を持たないこのクラブの会員に対して、契約して、安い料金ないしは良いコースでプレーができるように、予約を代行する「会員制事業」を考えたのである。1,000カ所のゴルフ場と契約し、5万円の会員権が45万円になったという。最盛期には、プレー代金の割り戻しを始めた。プレイ1回につき1,500円を金券で戻し、ボールやゴルフ用品と交換したこともあった。

いまでもこれに類似する例として、「スポニチゴルファーズ倶楽部（SGC）」があげられよう。2002年に設立し、「名門コースでのラウンドを実現する会員制組織」で、「月例会やSGCカップなど・・・年間90回以上運営」という。

<http://s-gc.net>

こういう考え方、つまりは固定資産に振り回されないで会員制事業の図式があっても、何ら差し支えないであろう・・・と。これは本稿筆者の考えである。

【ホテル伊東パウエルの誕生】

*** 会員制事業と伊東でのホテルコンドミニアム建設**

佐々木甫は、こうしたことを背景に会員制事業を計画した。専門店会の福利厚生施設としての事業である。昭和35年の池田内閣が始めた高度経済成長政策は、東京に未曾有の人手不足を招いた。福利厚生施設がなければ雇用の確保が難しいという現実があった。

東京信販の加盟店の経営者たちは、いわば共同で別荘を持つことに高い関心を示した。加盟店やゴルフ会員たちを会員とする「リゾート会員制事業」をスタートさせたのである。

この会員制クラブを「東京レジャーライフクラブ」と命名し、東京信販は本来の信販事業のほかに、このレジャーライフクラブの開発・運営事業を実施するようになった。

竣工したホテルは「伊東パウエル」と命名された。パウエルはパワフルとウェルネスの造語である。広告会社にいくつか候補をあげてもらい投票できめた。このようにして、昭和 50 年に伊東パウエルが開業したのである。なお、①は陸置き係留地(後述)である。

* 狂乱物価のさなか

ただし昭和 46 年に起きたニクソンショックは、田中内閣の「日本列島改造論」を軸に過剰流動性を招き、日本に「狂乱物価」というインフレ生み出した。

建設省は、高騰するに対応するべくに対応するべく計画の縮小や竣工の延期を勧告したほどである。佐々木甫が当初考えた事業規模はもっと大きなものであったが、縮小せざるを得なかった。

建設省の勧告に対し、たまりかねて地元の政治家に相談し、結果的には継続工事になった。

ただし、工事代金が 5%アップ。三菱商事の総合管理で、フジタ工業が施行した。

出典: Wikipedia の「オイル・ショック」から。

石油ショックないし危機のことで、1973 年と 1979 年の原油価格の高騰をいう。上の図は、その高騰ぶりを示す。日本では狂乱物価(高騰)を生み、日用品が市場から消えたほか、建築資材も跳ね上がり、工事費を直撃した。こうした現象が国内の随所に起きた。産油国の国際収支は黒字になる一方、発展途上国は資金不足に悩んだ。日本の経済政策は、賃金を物価上昇にフルスライドさせ、インフレの弊害が産むはずの混乱を回避した。

* 絶妙な用地確保

ふつうは公衆用道路の陸地側にあるのだが、伊東パウエルの建設用地は、海岸に沿って走る公衆用道路と海岸線の間が存在する(下図参照)。下図の白枠②がパウエル伊東である。こういう土地は相当な偶然か、よほどの巡り合わせがなければ入手できない。



相模湾に沿って走る一般国道は、134号（横須賀から大磯町・西湘バイパスを経て小田原）と135号（小田原から下田まで）である。したがって、伊東パウエルの前は135号線である。国道が海岸線に接して走る場合、海岸線と国道の間に、つまり海岸と接する形で、ホテルなどの私有の観光施設が建築されるケースは比較的珍しい。伊東パウエルの近くで似たような建設用地を持っているのは、ホテルサンハトヤくらいであろう（川奈ホテルゴルフコースは別途に触れる）。

そもそも、海そばの原っぱや崖っぷちなど、使い道もないし、そもそも登記があっても土地がないこともあって、本来は、誰も関心を示さないのだが、係留権付の住宅（有名なのは仏・コートダジュールのPort Grimaudや米・マイアミのPalm Island Park）とか、係留権付のヨットクラブ（マリーナ）などの開発事業を営むとなると、にわかに注目を浴びる。

この立地は舞浜の東京ディズニーランド（TDL）も同様だ。公有水面埋立法によれば、都道府県の土地開発公社は埋め立て地を造成して分譲できる。千葉県はオリエンランド（OLC、筆頭株主は京成電鉄だが、三井不動産の色が濃い）に、その一部を遊園地にするという条件を付して払い下げた。困惑した三井グループがディズニー（当時のWDP）のフランチャイズになったことが始まりである。

しかし海岸は規制が多い。ハワイのワイキキの海岸だって、たしか「米・海軍」の管轄（波打ち際ないしは水際線から最初の立木までが州知事・・・）のはずだ。日本の場合は、河川よりは解放され、海岸管理者は都道府県知事が多いといえども、海岸保全区域の管理を行う国の機関であるとされる。水際線に沿って走る道路の陸地側はいかようにも私有が可能だが、海側の私有は難しい。そこに、河川が流れ、海運用の港湾港や漁港があり、造船やエネルギーなど工場や公園が立ち並ぶ。それぞれに規制があり、ここで容易に紹介するのは筆者の手に余る。



（注）ご関心の向きは以下などを参照。交告尚史・三浦大介、東京大学公共政策大学院（海洋アライアンス）「2015年度冬学期 沿岸域管理法制度論講義案」

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/graspp-old/courses/2015/documents/5121501-20150910.pdf>

藤本昌志「現代日本の海の関連に関する法的問題（文科論）」神戸大学海事科学部紀要、2005
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004631003>

* 誇れる眺望と温泉

基礎工事が大変だったはずだ。マリコン（marine constructor）は寡占体制にある。護岸工事を官民いずれが負担のか、かなり高かったはずである。

全室オーシャンビュー48平米。ホテル・旅館というよりは、別荘の延長で、ホテル・コンドミニアムの発想と思われる。

今は使用していないようだが、客室内に小さなキッチンが付いている。

日本のリゾートクラブ客は旅館の延長で宿泊をとらえるため、観光とあまり変わらない。上げ膳据え膳を旨とするから、客室内にキッチンがあっても有難みは感じない。

しかし、アメリカのタイムシェア施設の延長で、長期(1週間程度)の滞在を想定するなら、実は、このキッチンは貴重である。うまく活用するときに、必ず来るような気がする。

温泉は単純泉だが、「瀧泉(とうせん)郷」が所有していた名湯を譲り受けた。

毎分110リッター湧き続けている。

* 安全第一の海岸管理

しかしながら、ホテルに海岸線が接していながら、海岸線の部分は、テトラポットなど護岸の資材が積まれて、宿泊客(あるいは滞在客)が、そこで遊びそこで時を過ごすような仕組みにはなっていない。

東京ディズニーランドは海浜地を埋めた後に建設したものだが、水際線は使っていない。

日本の海岸は、潮位の干満差はもとより、台風による高波や地震の津波が、普段は穏やかな表情見せている海浜地を、修羅場にしてしまい、人間に危害を与える恐れが十分にあるので、守りに徹した海岸に仕立て上げてしまう。海岸管理者として当然ではあろうが、いささか寂しい。

さらに日本の港湾は生産(モノ造り)港湾であって生活(楽しむ)港湾ではない。基本的にプライベートビーチが育ちにくい。

伊東パウエルのように、せっかく海岸に接する形で開発用地を確保しても、テトラポットでしっかり護岸されてしまうので、例えば建物から海岸に直接行くことができない。眺望だけが有利であることは確かだが、それ以外については実現できないのである。よって、おおむね公共用の施設が多い。

ちなみに前掲図の白枠②は、海に斜めに突き出した「陸置き係留装置」である。

また、「陸置きのプレジャーボート係留施設」は地上からみた画像である。

ところで、伊東は伊豆の東海岸である。リゾート開発の定石から言えば、夕日を浴びる西海岸のほうが有難味があるが、各位はどうおもわれるであろうか。



*** 月の鑑賞は？**

1 月の出入り、
 2 指定地点、3 緯度:35.4500° 経度:139.5500°
 標高: 0.0 m 標準時:UT+9h

年月日	出	方位[°]	正午月齢[日]
2017/1/13	17:51	69.8	14.8
2017/1/15	19:58	77.9	16.8
2017/2/12	18:41	80.3	15.1
2017/3/14	19:24	93.6	15.5
2017/4/11	18:11	96.7	14
2017/4/13	20:02	105.7	16
2017/5/11	18:50	108.1	14.6
2017/5/13	20:35	113.2	16.6
2017/6/10	19:22	114.1	15.3
2017/7/8	18:08	114.4	14
2017/7/10	19:39	112.1	16
2017/8/7	18:19	110.5	14.7
2017/8/9	19:36	102.7	16.7
2017/9/6	18:11	99.6	15.4
2017/10/6	17:55	85.1	15.9
2017/11/3	16:27	82.1	14.3
2017/11/5	17:52	71.7	16.3
2017/12/3	16:27	69.7	14.6
2017/12/5	18:21	65.5	16.6

アメリカの西海岸の夕日は自在だが、東海岸の場合は、特異な地点でなければ、海に沈む太陽はお目にかかれない。日の出とともに「活動」の開始ということはあっても、日の出とともに「酒」は似合わない。

しかし「月」となれば話は別である。左の表は、アメダスのある網代の経緯度を、国立天文台の「歴計算室」に入れて、計算した表である。

出典：<http://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/>
 1 日おきの計算で、かつ、正午月齢 14.0~16.9 を抽出したので、満月の出を愛でるには、いささか荒っぽい計算だ。また、実際の、月の出の方位[角度]に何があるかを確認していないし、日の入りの時刻、日照や天候のこともあるので、期待通りの月の出を実測していないので、確証はない。

しかしながら、満い月風の月の出の鑑賞は、秋に限ったことでもない。存外、月一回の月の鑑賞もまた一興はなかろうか。

*** 川奈ホテルゴルフコースと 135 号線海寄りの開発用地**



その意味では「川奈ホテルゴルフコース」は例外的な存在である。大島コースの創設は 1928(昭和 3)年。事業者は大倉喜七郎でむろん大倉組直営で始まった。

最初、初島に馬場のような施設を考えていたようだ。エピソードはきりがいいほどたくさんある(大倉雄二『男爵 元祖プレイボーイ大倉喜七郎の 優雅なる一生』文藝春秋、1989 年)。また、日本経営史や観光史・ホテル事業史の枢要なテーマのひとつでもあるので、そちらにお任せしよう。

1921(大正 10)年には、公有水面埋立法が成立していたが、用地の大部分は崖の上だ。また、鉄道もないあの時期ということもあるが、過疎地域に上手に開発用地を見つけた。

左図は上空から見た画像である。右上の破線で描いた○印が、夷子神社の位置である。その位置における地上の画像を下に掲載した。

下の写真の中央にある建物の左側が海、右側の森の部分が川奈ホテルゴルフコースの事業地である。この森が保安林とか

地域森林計画対象民有林かはわからないが、おおむねゴルフ場の所有であろう。

この森林を伐採してまで、フェアウェイを確保する必要もない。そのうえで水際線とゴルフ場用地は接していない。

すくなくも、下の境界例でいえば、春分の満潮時に水際線が森の部分まで押し寄せることはなさそうだ。よって、森林が公有水面としての海浜地にはならないため、私有も可能である。あとは、せいぜい、魚付き保安林に指定される程度である。

また、改めて鳥瞰図や、下の拡大図をみても、漁港に適した入江はなく、あっても崖の下で漁港にはなりにくい。

下水の処理がきちんとなされていれば、漁業補償もなしで済みそうだ。

これだけの崖に縄文人が住むとは考え難い。「埋蔵文化財包蔵地」として周知されていたということもなかろう。むろん、許認可のことだから、何が妖怪が出てくるかもしれない。が、大倉はうまい用地を探してゴルフコースに仕立てたといえよう。



* 大倉商事の破たんと維持できなかった「川奈」

ただ付記すべきは、終戦時の財閥解体があったとはいえ、また、90年バブルの資産デフレのあおりを受けたとはいえ、さらに元祖プレイボーイか もしれないが、それ以上に、日本のリゾートビジネスでは原点に位置する大倉喜七郎、あるいはその後継者でも、日本のゴルフ業界きっての名門ゴルフ場の事業の継続は難しかったことである。

1998(平成10)年、大倉商事が自己破産、2002(平成14)年東京地裁へ民事再生法を申請し経営破綻した。負債総額は670億円という。大倉の破たんにしては少ない額である。

買い手はいくらでもある感じだが、紆余曲折を経て堤義明の「コクド」が220億円で引き取るも、その堤も西武から外され、いまや外資系のヘッジファンドの手中にある。

収益に比べ、過大な固定資産を抱える宿命は、リゾート施設の場合、不可避である。バブル期の川奈は、正月元日の第一組の「オーナー(最初にティーショットをする人)」は誰かが話題になっていた。時節柄、プレミアムがついていたのかもしれない。

品格と人気を備えたはずのゴルフ場だった。本来パブリックコースで運営されていたが、1984(昭和59)年に独自の預託会員制を導入、また、預託金返還延期を図るなど、あれこれ業態を考え、実行したのだろうが、その維持は難しかった。

大倉財閥は、新潟・新発田から江戸に出た喜八郎が1858年に開業した乾物屋に始まる。35歳の折に洋行を敢行、帰国後73年、



東京銀座に貿易商社を始めた。翌 74 年にロンドン支店を開設(日本初という)、日清戦争の戦時物資の調達に従事し、93 年に合名会社大倉組を創設した。

貿易事業の一方で、土木事業に進出し、大倉組土木(現在の大成建設)を設立した。

東京最古の地下鉄は、1927(昭和 2)年の、早川徳次による銀座線(浅草 - 上野間)であるが、この土木工事は大倉組土木も従事しているはずだ。

* 大倉でも川奈の維持に失敗

しかし、大倉組土木は、大倉家のお屋敷お抱えの「棟梁さん」みたいな存在で、グループの中心ではなかったという。

日清製油、東海パルプ、帝国繊維、日本油脂、新日本無線、日本化学工業、サッポロビールなどが傘下で育つ一方、観光事業に投資をし、帝国ホテル正統のオーナーであり、オークラ、雲仙、赤倉などのホテルを開業した。

川奈はその先駆けで、まさに、日本のリゾート事業の元祖にして、ゴルフ場経営はお手の物のはずであったのだが・・・。

終戦後の財閥解体にもめげず、生き残った大倉商事が、バブル崩壊とはいえ、こうもあっさりと倒産するとは、事業を維持することの難しさを物語る。グループ間で互いに助け合うというような発想は、もはや実務的ではないのかもしれない。

大倉系の資金繰りの担保にはいってつぶされた。まじめに会員制を維持したら続いたかもしれない…という仮説は、そう安易には捨てられない。

財閥解体の折、総務課長として事務処理をしていた某氏(お名前を失念してしまったが)は、ある研究会の席上で、「大倉組には金融機関がなかった」「それでホテルのような固定資産に投資をしていった。これが果たして良かったかどうか」と語っていただいたことがある。

ゴルフ場事業の魅力は預託金という無担保・無利子の負債が、会員権価格次第で無期限になる。あくまで「会員権価格次第で」という条件があったが、事業計画の段階ではこのテールリスクを一流の金融機関でさえ無視した。

この事業の難点は生み出す収益が過少なことだ。関東地方だと年間入場者は 5 万人/18H。資金繰りは簡単に予測できるが、少々瑕疵があっても、貸借対照表の魅力(負債=預託金=無利子・無担保+無期限 ÷ 自社のかね風 ÷ 資本増=非課税)には勝てなかった。

破たんの整理の理論は、財務会計ほのかに民法が加わり、縦横に展開される。たとえば、以下のレポートは興味深い。

西村國彦・栗橋孝芳(さくら共同法律事務所)「企業再生・ゴルフ場の再生のプロたちが語る(第 2 部) ゴルフ関係者は、100 年に 1 度の経済危機をどう乗り切るべきか」21 年 5 月 25 日。

出典：<http://www.sakuralaw.gr.jp/publication/nishimura/090525.pdf>

しかし、川奈ホテルゴルフコースの場合、どう議論されようが、遠巻きに見ている限りは(細部のメンテナンスは容易ではあるまいが)、その固定資産は人間に対し、本来提供すべきサービスを可能とする「姿」「形」で、厳然として残っている。不思議なことだ。

国道 135 号線(川奈ホテルゴルフコースの通りは 109 号線)沿線の事業は、このような示唆を事業者たちに与えているのではなかろうか。

また、つぎに登場する佐々木亨は、日本の高度成長期に、アメリカはじめ国際市場で鉄鋼ビジネスに従事したビジネスパーソンである。畑違いのリゾートクラブ事業で描いた「ビジネススキーム」「ビジネスの構図」は、往年の鉄のビジネスとどのように違って映ったか、語っていただく折があること期待してやまない。

このことは本稿筆者が抱くテーマである。日本のファッション衣料が外国ではさっぱり売れない（ファーストリテイリングは出藍の誉れとして）のと同様に、日本のリゾートビジネスも国際市場でははかばかしい浸透はみられない（1973年ごろから始まった東急の米シアトル郊外・ミルクリーク開発プロジェクトのような興味深い成功例もあるのだが・・・）。あるいは、ランボルギーニやフェラーリのようなクルマの生産販売事業が苦手なのと、どこか共通するのかもしれない。

リゾート開発と事業化には固有の難しさがある。これは得意の絶頂であろうトランプ（Donald John Trump）とて同様である。

* 「川奈」を取り上げた背景

伊東パウエルに「川奈」をもちだしたところで何になるのか・・・、場違いであろうと指摘されよう。

以下は、書き手の主観にすぎないが、たまたま、コロラドのBeaver Creekやミラノ郊外のLake Comoの別荘（それぞれピンキリだが）を想起するに、往年の日本では、「川奈ホテル」あたりが限界だったのかと思う次第である。小田原・箱根の、往年の著名人別荘・建築物は、意外に質素ではなかろうか。それに耐用年数がある。木造の劣化は避けがたく、維持が難しい。まして、その施設を維持すべき「個人のファミリー」や「コミュニティ」の維持も難しい。「川奈」の難しさは、「川奈」を維持すべきコミュニティの崩壊にあったのではなかろうか。

米国はともかく、イタリアの会社の大半は日本との比較に及ばないほど「小型」であることが多い。ファッション製品関連事業をみると、成功例にも、小型で同族ないし同族風の会社が多い。ある雑談の席で、「相続税がないから親の家に住める」というコメントがあった。

【番外・日本リゾートクラブ協会の前史】

昭和50年代の初めの頃、いわゆる会員制リゾートを手掛ける事業者はいくつか存在していた。少なくとも、アップル（伝敏郎）、ニットーコテージ、エメラルド（安達）、中野（根岸）、泉郷（久保川）、宝塚（林）、ダイヤモンド（中田）を数える。カッコ内の固有名詞は、よく会合に出てきた人たちの名前である。宝塚やダイヤモンドは比較的后発で、ダイヤモンドが軽井沢と芦ノ湖にクラブをオープンした1973（昭和48）年である。東京信販は、ある日、その中田から誘いがあり、これに加わるようになった。

まとめ役は佐藤勇吉であった。佐藤は、当時、国内きっての会員制の理論派で、事務局長役を務めていた。いわゆる任意法人なので、会費を集めて、エメラルドの赤坂事務所に集まって、啓蒙活動や情報収集と交換、会員募集のあり方などを議論していた。こうした運営が10年程度は続いた。

当時、「豊田商事事件」が起きて、会員募集活動が違法ないしは反社会的な取引として誤解される恐れがあった。

任意法人のままでは説得力に欠けるということで、当時経済産業省のサービス産業室長であった北畑隆生（東大法、72年入省、後に事務次官、「シルバーコロンビア計画」の発案者）に相談しながら、社団法人化を進めるようになった。

社団法人日本リゾートクラブ協会は、1988（昭和 63）年 2 月、リゾートクラブの調査研究、情報収集提供や消費者相談などを目的に、通商産業省（現経済産業省）許可の社団法人日本リゾートクラブ協会として設立された。初代会長に中田が就任した。

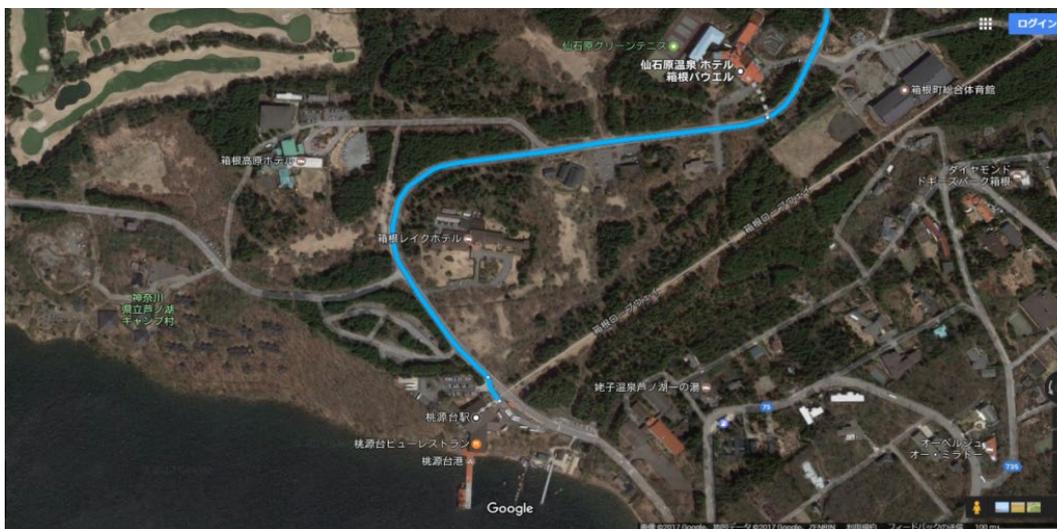
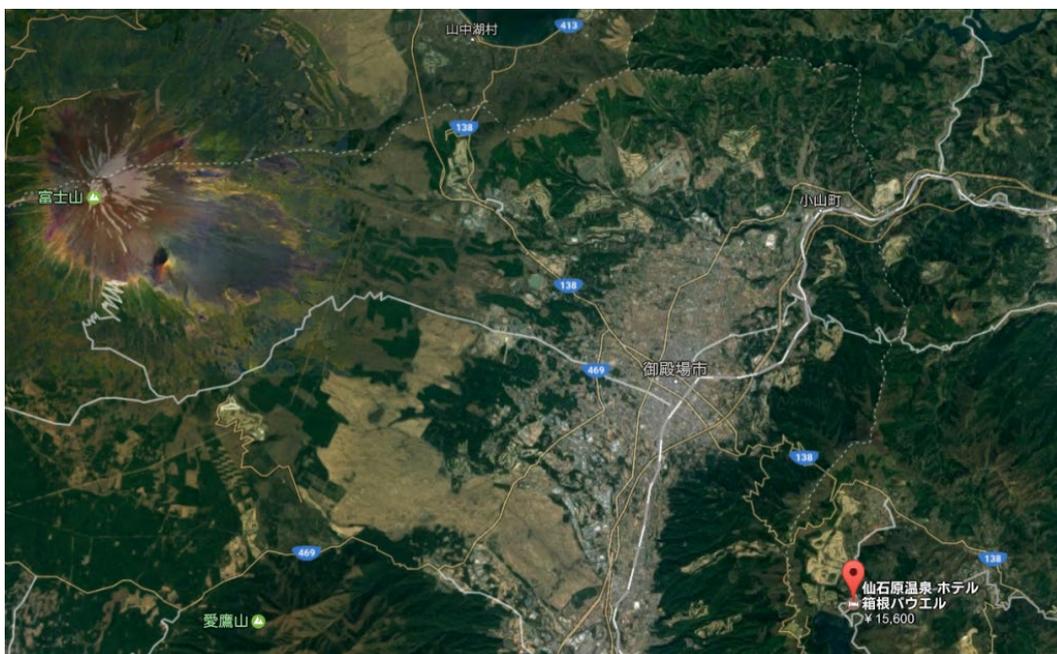
そして、社団法人法の改正があり、平成 25 年 4 月 1 日、内閣府の認可により一般社団法人に移行した。

【パウエル箱根の買収と展開】

* 佐々木亨の登場

昭和 53 年に佐々木亨（現会長）が、21 年勤続した三菱商事を退職して、東京信用販売に転職してきた。海外経験も長く合理的な判断のできる人物である。

佐々木は 1 部屋当たりの会員数を 14 名に限定して、対外的な信用を図ることが、この事業を推進していくにあたり重要なことであると考えていた。従ってクラブの会員が増えれば、客室数も当然に増えるものと考えていた。



東京から2時間ないし3時間の範囲で、温泉と眺望にこだわり、いい場所に施設を増やそうとした。伊東パウエル以降の施設の展開は後掲の通りである。

会員の増加に施設が追いつけない状態が続いた。やむなく、既存施設を買収することもあった。アップルから塩原の施設を買収した。施設を展開していくと、なんとしても箱根に施設が必要という結論に達した。あれこれ探しているうちに、三菱商事の友人から「出物がある」と紹介された。これが現在の箱根パウエルとの接点である。

* 湖尻富士見荘の買収

その出物は「湖尻富士見荘」と称し、レンタカー会社の日産観光サービス(株)が所有、経営していた。交渉の結果、1986(昭和61)年に東京信用販売は、これを買収し、改修の上、新たな施設を増築することになった。したがって箱根パウエルは1986(昭和61)年の開業である。1985年の「プラザ合意」の後を受けて、まさしくバブル前夜、佐々木としては絶妙のタイミングであった。

その時点では、既存の本館、西館、東館が存在した。本館と西館はいつできたのかよくわからない。東館は昭和38年に竣工している。



契約書には「1億700万円」で大成建設が請負、三菱地所が設計監理をした。この東館は山一証券の研修施設であったと言う。

もともとの施主の土田三郎は、1957(昭和32)年11月25日の山一証券第17回定期株主総会で取締役役に選任されていた(渋沢社史データベース)。その後の経歴はいまのところわからないが、退任後の事業であったのかもしれない。しかし、用地の選択、前庭の植栽、眺望の取り方、建築物のたたずまいの作り方などから、土田の開発眼はかなり確かなものがあったと推定される。

出典：渋沢社史データベース <http://shashi.shibusawa.or.jp/>

先行した土田の端げいすべからざる開発眼を継承し、箱根パウエルは、戦後昭和のレトロな雰囲気をいささかならず保持しながらスタートした。それは、大団体大宴会好みの温泉旅館と、確実に、一線を画すことになる。

余事ながら、土田と同時に、山瀬正則が取締役に就任している。山瀬は山一証券株式部長で、1967年6月のスエズ運河閉鎖(第三次中東戦争、イスラエルとエジプト、シリア、ヨルダンをはじめとする中東アラブ諸国の間で発生した戦争)のさい、海運株の買い方(この戦争は短期に集結したのでは大敗し、投信部長に配置換えになった)として令名をさせた人物である。なお、このときの売り方は石井久(立花証券の買収で、後に同社会長)であった。

* 静肅なたたずまいの開発用地

1985(昭和60)年以降のリゾート開発ブームで顕著になるのだが、箱根町での大規模開発行為を推進するには、幾重にも積み重なった規制をクリアする必要がある。

自然公園法や森林法だけではない。神奈川県のみならず、箱根町独自の条例が網を被せる。上高地の大正池周辺(自然公園法の特別保護地区)ほどではないにしても、鎌倉や京都と並んでなかなか厄介である。

この周辺は国有林と県有林が入り組んでいる。ちなみにパウエルは神奈川県と6000坪の賃貸契約をしている。この建物から桃源台(芦ノ湖北端)に向かう南側の斜面は国有林である。そして北西方向には、箱根山の外輪山のひとつ、長尾峠越えに、富士山頂上部分がくっきりと顔を出す。いつも見慣れた、すそ野からの大空容とは異なり、なんとも奥ゆかしく可愛げがある。

この温泉と眺望、買い手はよくぞ入手したというべきである。しかし本敷地とその周辺は、町の条例で集団施設地区(?),「スポーツ地区」と指定され、そうそう建物は建たない。容積(15%)も用途も厳格に定められている。買収後増築し昭和63年にオープンしたアネックスも3階建て640坪であったが、スポーツ施設の設置が義務づけられたため、テニスコート6面、25mスイミングプールを設置した。

このスポーツ地区の中に、「レイクアリーナ箱根」がある。これは箱根町総合体育館である。ここでは例えば日本サッカー協会の「フットサル」の選手の合宿やコーチ資格の研修指導が行われる。こうした催し物の宿泊・会議で、箱根パウエルが利用されることもある。



*「たたずまい」を評価する豊田箱根パウエル総支配人

ホテル箱根パウエルの総支配人豊田俊介は入社3年目である。もともと松山の出身で道後温泉で働いていたが、あまりに俗化して、魅力を感じなくなったので、思い切って松山を出奔し、東京でサラリーマンをしていた。勤務先の箱根の保養所を利用するうちに箱根が好きになった。

それで箱根の別のホテルに4年間勤務した。たまたまパウエルで募集があり、応募をしたところホールに採用されたことが始まりである。

都会に近いのに、自然が豊富で気候も温暖である。特殊浴場も並ぶ故郷の温泉場に比べると、箱根の客層ははるかに良い。箱根パウエルは、飲んで騒いでというよりは、別荘の延長で静かに滞在していただくという雰囲気がある。これを大切にしたいと言う。豊田が強調するのは、静かな「たたずまい」である。

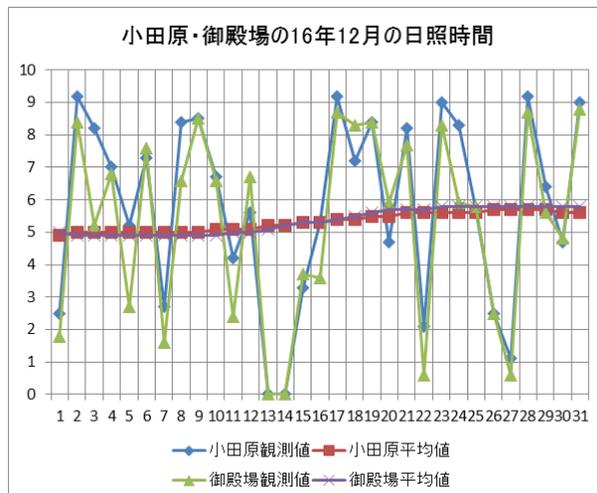
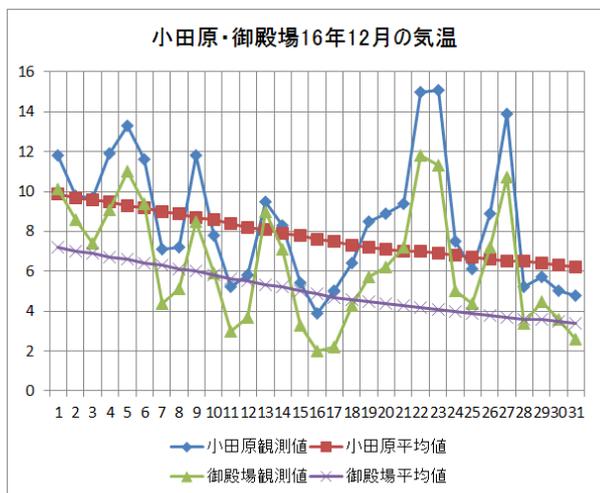
このレポートのための現地取材は、16年12月11日日曜日である。箱根は典型的な閑散期。たたずまいは気候で変わる。右の画像は当日13時ごろの現地である。この日の気温と日照は以下の図のごとくである。

当日の12月11日の平均気温は、12月の中でも寒い日であった。気象庁のアメダスでは、箱根は降水量のみの観測なので、小田原(標高14m)と御殿場(同472m)の観測値から、箱根の状況を推定してみよう。小田原と御殿場における16年12月日々の平均気温を左下に示す。16年12月11日の平均気温は16年12月の中でも低い方に属する。また12月11日の平均気温の25年間の平均から見ても、11日の平均気温は低い

ことがわかる。つまり 16 年 12 月 11 日は 16 年 12 月の中でも寒い日であったし、平年並み以下であり、寒かったことを意味する。

同様に 16 年 12 月 11 日の平均日照時間は、小田原・御殿場ともに、16 年 12 月の中では短く、12 月 11 日の平均日照時間の 24 年間の平均から見ても、この日の日照時間は短かった。

以上から、我々が現地調査をした 16 年 12 月 11 日は、比較的寒くて、日照に恵まれなかった日であった。

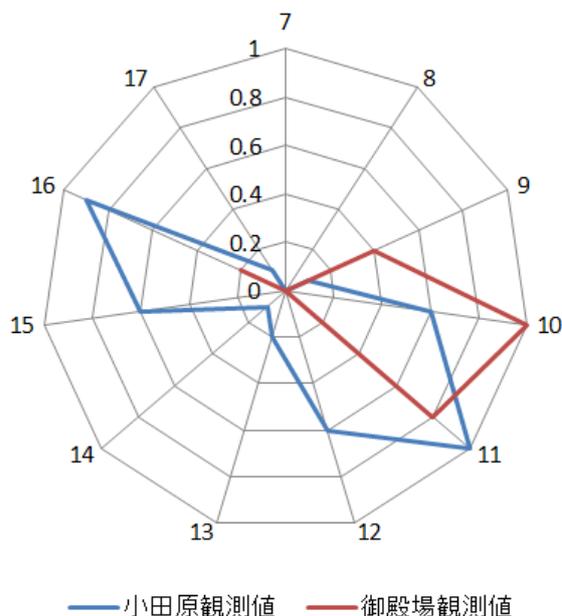


念のために、この日の日照時間を、時間帯別に追跡すると、小田原、御殿場ともに、午前中の 10 時台・11 時台で晴れたけれど、午後はほとんど太陽が見えない日であった。掲記のにわか雪模様の写真は、こうした太陽の见えない、寒くて曇った日の谷間で、一時的にしぐれた状態を映し出したものである。要は、どんよりとした、陽の射さない日 (a dull, sunless day) だった。

お世辞にも観光日和とは言えないこの日の箱根パウエルのたたずまいは、訪問者にとって、どうしようもないほど退屈で、つまらなく映ったかという、決してそうでは無い。まさに「静寂」そのものであって、その静寂さは、何かをしようと駆り立てるのである。それは箱根の名所旧跡を訪ね歩くツアーでは無い。例えば、外から仕事を持参して、この静寂さの中で処理してしまえという動機である。あるいは、少数の仲間が集まって、一夕浅飲談に及び、この静寂さになにがしか問い掛けるのも、また楽しいことなのであろう。

もっとも支配人の豊田の立場からすれば、1 年中静寂であっては、施設そのものの維持ができない。四季のはっきりした日本では、年中にはいろいろな日があって、いろいろな利用の仕方があって差し支えない。これが、自分の別荘なら、閑散期は閑散期なりの使い方をするであろう。

16年12月11日の時間帯別日照時間



* 富士箱根国立公園の中心に滞在できることのイニシャルコスト

一定の規模を超える大規模開発を行う場合は知事等の許可が必要である。その開発用地に適用される数多くの法律に制約され、一つ一つをクリアしていかなければならない。法律の執行にあたっては、相当部分を都道府県知事に委任するために、都道府県庁の課の数で 20 から 30 ほどかかわりを持つことになる。

国立・国定・都道府県立の自然公園には、環境庁が所管する「自然公園法」が適用される。自然公園といえど



も保護の一点張りではなく、利用も含めて「公園計画」を策定する。公園内を、公園の風致を維持する特別地域(第一種から第三種)、さらに重要な特別保護地区、海域景観維持の海域公園地区、以上を除く普通地域に分ける。大筋は国が決め、地方自治体は、この法律に沿って、適宜に条例を作り、実情に応じた規制を加える。

箱根パウエル周辺は町の条例で「集団施設地区」に指定した。それで、箱根町立体育館やいくつかのゴルフ場(左図参照)もある。この規制区域にあるパウエルも、室内 25 m² 温水プールとテニスコート 6 面を設けた。箱根で 25m プールを持つのはパウエルだけである。

ただしスポーツにも流行があるし、クラブ会員の高齢化によりそのスポーツに関心が薄くなる。少なくとも箱根におけるテニスは、以前ほど盛ん

ではない。パウエルでも 6 面あるテニスコートのうち 4 面を廃止した。この面積を客室用建物等に転用はできない。

スポーツ施設の維持が重荷になる場面もありうるが、好ましい自然の中に存在する施設は、やはりそれなりのコストを払わなければならない。そのうえで、かなりの面積の森林が保存されている。

* 春眠暁を覚える

春眠暁を覚えず、处处啼鳥を聞く…という。春の眠りは心地よくて夜明けも知らず、鳥のさえずりが聞こえる云々だが、箱根パウエルでは、ことに春先の鳥のさえずりは朝早くからはじまり、春眠を妨げるほどという。よって暁を覚えることになる。これだけ規制が厳しく、しっかり守られているので、このたたずまいは、今後も長く維持されるであろう。

また、国有林に植林される樹木は、スギやヒノキであって、必ずしも借景にふさわしいとは限らない。湖尻富士見荘からパウエルに代替わりした頃は、本館から芦ノ湖は眺望できた。しかし今国有林のスギやヒノキが伸びて眺望できない。であるからといってスギやヒノキの芯を止めてくれとは要望できない。あくまでも何らかの目的を持った育林・造林であるからだ。

また、これだけの森林ゆえに、イノシシをはじめ、タヌキやキジ、穴熊が生息する。イノシシのゴミあさりは日常化している。タヌキも住み着いている。箱根パウエルに 1 週間滞在すれば、こうした出会いも許容し、楽しみのひとつとならなければならない。



* 目の前にある路線バス停

リゾートには、長く(1週間程度)滞在するという意味と、たびたび訪れるという意味がある。

こうした意味で、自ら運転して訪れることもできるし、また、自分で運転しなくても訪れることが可能である。これは意外に重要ではなからうか。

箱根登山バス(小田急系)の路線バス(小田原または箱根湯元と桃源台間)の停留所に「公園管理事務所前」がある。この、停留所「公園管理事務所前」はすなわち「ホテル箱根パウエル前」でもあるのだ。クルマの運転なしでいけるというのも、考えようによっては贅沢な話なのだ。

それも山の中の路線にしては頻繁に来る。左の画像では 12~15 分間隔で運転している。

またロープウェーの駅「桃源台」からは歩いて 700 メートル、路線バスなら停留所 3 つ分である。パリの街の中だと、歩いて数百メートル以内に、地下鉄の駅が 3 つ 4 つあるという例がある。東京の都心でもそういう例が増えてきたが、こうした便利さは開放感を味わえる。箱根パウエルのアクセスの容易さは、こうした開放感に通ずるところがある。いつまでも自動車を運転できるとは限らない。また外へ自家用車運転できたところで、車に縛られない自分を認識することも リゾートの効用かもしれない。



* 閑散期にみずからクルマを運転しないで気軽に滞在



閑散期ならいつでも行ける。会員制ならば交渉次第で長逗留もできる。仮に自分で別荘を持っていたとすれば、真冬に霜柱を踏んでみようと思うこともあるかもしれない。旅行代理店を通して、ホテルや旅館を予約して、1泊2食でものみ遊山をして引き揚げてくるのとは少し違う。こうした感覚は、リゾートの事始ではなからうかと思う。

東京から箱根は、昔の東海道線を考えると3時間程度を要したので、ちょっとした旅行気分であったが、今や新幹線など、高速道路なりを使うと、場合によっては1~

2時間程度でついでしまい、東京から箱根を訪れるといっても、都内の移動しているようなものである。箱根パウエルの移動の仕方は、自家用車やバスを仕立てて到着という方法のほかに、鉄道+路線バス、鉄道+ロープウェイ+路線バス、鉄道+路線バス+湖の船+路線バスと方法もある。

なお路線バスは小田原ないし箱根湯本と桃源台を結ぶ。「公園管理事務所」から「箱根湯本」まで40分、「小田原駅」まで50分。ただし渋滞が始まればこの2倍の時間はかかる。また雪が降れば3時間ということもある。そうなると、クルマはみな同じ条件だ。

箱根パウエルは、国土地理院の資料によると、標高：825.5M（データソース：DEM5A）と示される。電車の始点の小田原駅は14M、ケーブルの終点の早雲山が750M、そして箱根山は1,438Mである。山岳ゆえに気候のかわりは早く、雪や暴風、霧や雷は付き物である。

出典：http://www.gsi.go.jp/johofukyu/hyoko_system.html

箱根パウエル・桃源台間は700Mである。徒歩・タクシー・バス・送迎で桃源台まで行けば、よく知られたように、

あとはロープウェイ

<http://www.hakoneropeway.co.jp/>

+ケーブルカー +登山電車

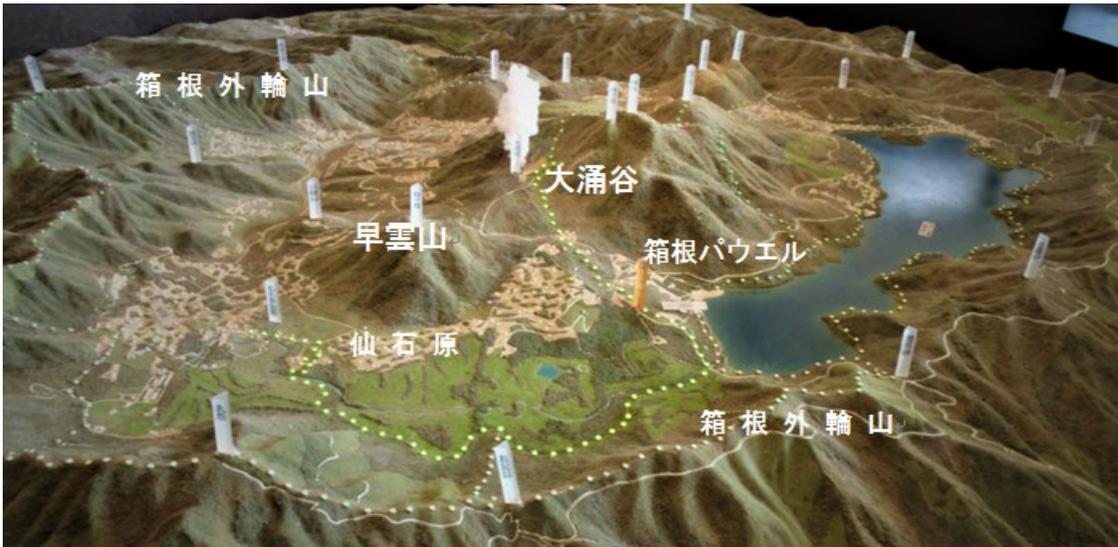
<http://www.hakone-tozan.co.jp/station/>

の組み合わせで、箱根湯本なり小田原にたどりつける。

もはや、クルマで自分のステータスを説明する必要もなし、あえて、他人を雇用して運転させる必要もない方なら、「閑散期にみずからクルマを運転しないで気軽に滞在」という提案をご理解いただけるかもしれない。

ただし、箱根パウエルにはバリアフリーの設備はない。当時はそういう規制がなかったので、バリアフリーの設備は設けなかった。建物の構造上、これからバリアフリーの設備を追加するのは、非常に難しいとのことである。





*** 全山に「擬似洋風」の趣き**

リゾート開発の定石で、「都会から最初の標高 1,000 メーターは買い」の格言から見れば、箱根はその典型例である。ここで明治以降の箱根開発史を論ずる余裕はないが、箱根に建設された名のある別荘・宿泊施設は、なによりの証拠になる。ステータスシンボルの意味もあるが、冷房・空調がなかったのもおおいなる理由である。

小田原から箱根かけて存在する、数多くの著名な年代のものも建築物は「擬似洋風」の趣がある。ここで箱根の歴史を紐解く余裕はないけれども、「擬似洋風」の醸し出す雰囲気、箱根の特徴といっても差し支えないであろう。豊田の言う雰囲気は、こうしたことも含まれるのではなかろうか。

紅葉 1 つとっても、湯本から芦ノ湖まで 11 月下旬を中心に 1 ヶ月は楽しめる。3 月のウグイスはもとより(ただし梅の花はあまり見かけない)、5 月の桜、6 月の紫陽花、9 月中旬から 11 月にかけてススキなど、いつでも気軽に花見の材料にはことかかない。

温泉もいくつもあり、それぞれに泉質が違う。少々割高にはなるが、タイプの異なるゴルフ場がいくつかある。漁港が近いので、山の宿泊施設でありながら、海産物に恵まれる。田畑が少ないので地産地消は少ない。逆にそれがプラスに作用し、グローバルな料理が似合うところだ。

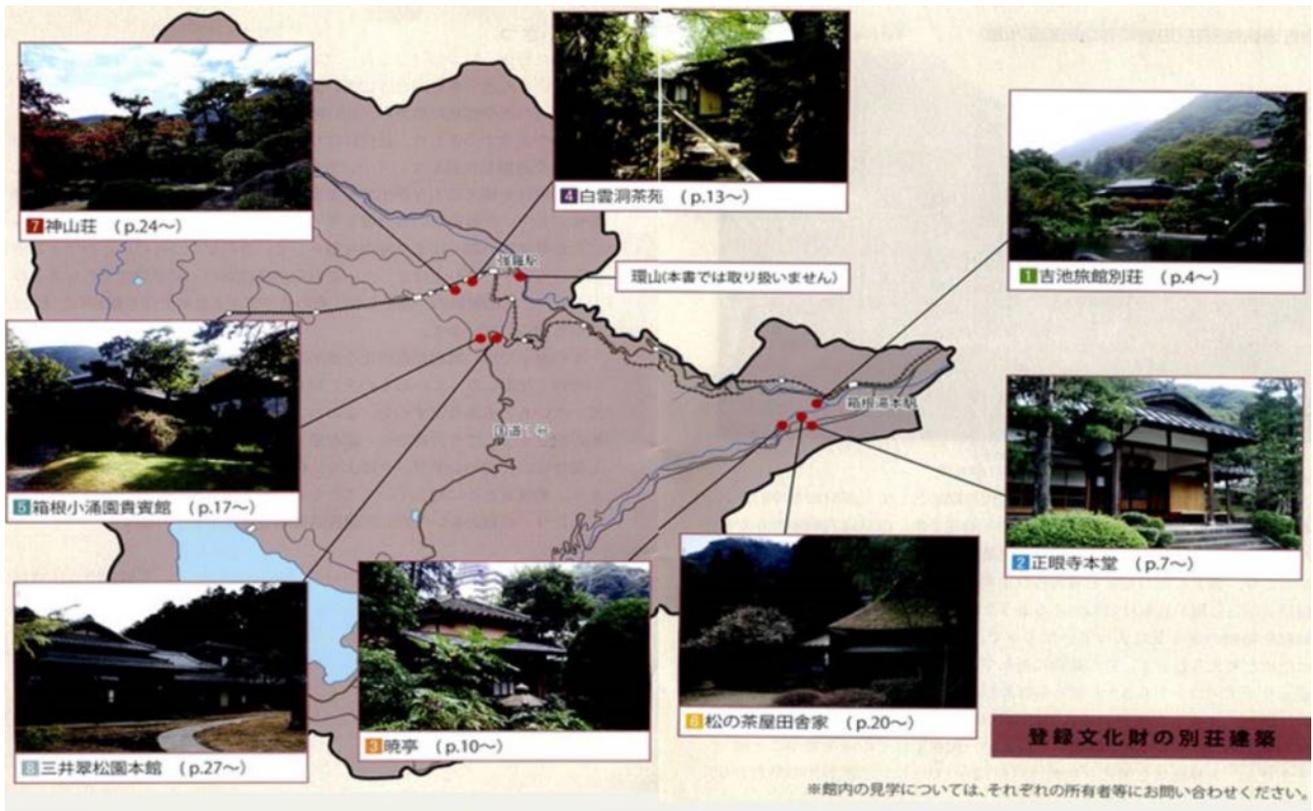
庭園はそう簡単には変えられない。最初に作った人のセンスが出る。そういう意味では、湖尻富士見荘を作った土田は良いセンスを持っていたのではなかろうか。箱根パウエルの冬の樹木を見ていると、それなりの雰囲気を感じる。



それは掲記した小田原や箱根の「名園銘邸」に匹敵するを意味しない。戦後の三等重役ならぬサラリーマン重役にも、こういうセンスの持ち主がいたという称賛である。

ただし、庭園の維持は容易ではない。いくつかのポイントは従業員が総出で行い、それ以外はシルバー人材を活用して、なんとか雰囲気を持しようとしている。

左図は小田原市内にある清閑亭(旧黒田侯爵別荘)である。現在は小田原市の所有という。福岡や東京赤坂福吉の本邸の他、沼津や大磯にも別荘を構えていた。しかしそれにしても、それなりの本邸(現存しない)に比べると、この別荘はいささか地味である。ただ、別荘とはそういうものだ、その昔、聞かされたことがある。箱根や小田原の旧別荘建築めぐりをすると、どういう印象を持たれるであろうか。



箱根の近代建築・別荘建築 出典・ワンコインシリーズ11 箱根町教育委員会

*** 温泉自慢**

成分			
1. 温泉利用施設名称			
2. 源泉名 大涌谷温泉 蒸気造成混合泉1号線(温泉荘方面)			
3. 泉質 酸性-カルシウム-硫酸塩温泉 (旧泉質名 酸性-石膏泉)			
4. 泉温 源泉 63.6℃ 浴槽 ℃			
5. pH 源泉 2.5			
6. 温泉1kg中の成分および分量 (1) 各成分および分量			
陽イオン	mg	陰イオン	mg
ホウ素イオン (B ³⁺)	3.19	フッ素イオン (F ⁻)	0.07
リチウムイオン (Li ⁺)	0.00	塩素イオン (Cl ⁻)	99.4
ナトリウムイオン (Na ⁺)	69.8	臭素イオン (Br ⁻)	0.03
カリウムイオン (K ⁺)	4.79	硫酸水素イオン (HSO ₄ ⁻)	77.5
マグネシウムイオン (Mg ²⁺)	41.0	硫酸イオン (SO ₄ ²⁻)	731.
カルシウムイオン (Ca ²⁺)	117.	硝酸イオン (NO ₃ ⁻)	0.51
ストロンチウムイオン (Sr ²⁺)	0.02		
第一鉄イオン (Fe ²⁺)	16.5		
アルミニウムイオン (Al ³⁺)	14.8		
マンガンイオン (Mn ²⁺)	1.39		
亜鉛イオン (Zn ²⁺)	0.04		
陽イオン計	266.	陰イオン計	909.
遊離成分	mg	微量成分	mg
メタケイ酸 (H ₂ SiO ₃)	191.	銅イオン (Cu ²⁺)	0.01
メタホウ酸 (HBO ₂)	2.62	鉛イオン (Pb ²⁺)	0.00
遊離化水素 (H ₂ S)	0.22	カドミウムイオン (Cd ²⁺)	0.00
遊離硫酸 (H ₂ SO ₄)	0.81	総ヒ素 (As)	0.004
		総水銀 (Hg)	0.000
遊離成分計	195.	微量成分計	0.01
(2) 成分総計 1.372 g/kg			
7. 温泉分析年月日 平成21年8月14日			
8. 分析者 神奈川県温泉地学研究所 神奈川県知事登録第1号			

大涌谷から配管を伝わって送湯される温泉は自慢に値する。左上の成分表にあるように、源泉を63度、pHは2.5で酸性の温泉である。

引湯の過程で温度は低下するが、それでも夏は暑すぎ、また冬は冷えるので、加水、ないし加温を行う。

完全なる「かけ流し」。循環装置は使っていない。無論入浴剤は使っていない。法令により消毒処理はしている。

今大涌谷の噴火に伴う引湯停止状態のため、箱根の強羅温泉からタンクローリーで引湯している。

左下の成分表のごとく、強羅温泉の源泉は90度。pHは8.7。アルカリ性の温泉である。その日の寒暖に合わせ、加温・加水を行う。この判断は結構難しい。お客様の入浴の時点で、少しぬるめの41度前後になるように、朝4時半に起きて判断する。

*** 大涌谷噴火騒動**

箱根の大涌谷では過去の噴火が活発になった15年6月30日から入山規制が始まったが、16年7月26日より1部解除になっ

た。この入山規制で、会員およびビジターの宿泊者数は、大幅に減少した。しかし、その後の推移をみると、おおむね 8 割 程度は戻っている。

箱根パウエルは大涌谷の河口から噴出する蒸気由来の、硫黄分の多い白濁した温泉を引いて使っていたが、石膏分を含む温泉は配管を詰まらせるので、頻繁な掃除が必要である。入山規制で配管の掃除ができなかったために、給湯が止まってしまった。7月26日の解除によって、配管の掃除が進み出したが、途中の3つに分岐する地点から、パウエルに接続する部分の装置が進行中である。いまだ入山規制がある。

そこで、強羅からのタンクローリーで温泉を運搬し提供している。大涌谷の温泉と強羅の温泉では泉質が異なる。「パウエルの温泉は白濁しているのに透明なのはおかしい」とクレームをつけるお客様もおられるが、これはなんとも致し方ない。しばらくは強羅の温泉を仙石原で楽しんでいただくということになる。

* インターネット対応

フロントとアネックスはインターネット WiFi 対応している。この周辺の六箇所の事業所が集まって、国土交通省の「宿泊施設インバウンド対応支援事業」に応募した。これで順調にインターネットを導入することができた。

* 閑散期のクラブ会員感謝月間

このところ外人のビジター客が減少している。その分日本人客のバスツアーが増えている。

それでも、2月そして6月と9月は比較的閑散期である。クラブ会員の中には、よく訪れるお客様もいて、月に2日から3日、年間20日ぐらいを ご夫婦で過ごされる例もある。メンバーズルームはちょっとした麻雀や囲碁を楽しむ場所だ。クラブ会員の感謝月間として、麻雀や囲碁の会を開催する。今は20名程度である。昔はゴルフや テニスだったが、今は形が変わった。



【90年バブルと資産デフレ】

* バブルの大波が到来

平日は暇で土休日は多忙だった。繁忙期と閑散期は明確に分かれていた。しかし会員が増えると施設も増え、色々なことができるようになった。たとえば、ワンルームマンション事業に進出し、また、大阪・新御堂筋や札幌でホテル事業を実施した。

1986(昭和61)年に買収した箱根パウエルにアネックスを増築した。その竣工は1988(昭和63)年であった。過剰流動性で日本経済は、バブルの上り坂を登っていった。

佐々木は資産バブルは予感していた。しかし、東京信用販売の貸借対照表の資産(投資)と負債(預かり金)は、文字通りバランスがとれていた。だから「健全な状態」と判断していた。「うまくいっている」と思っていた。

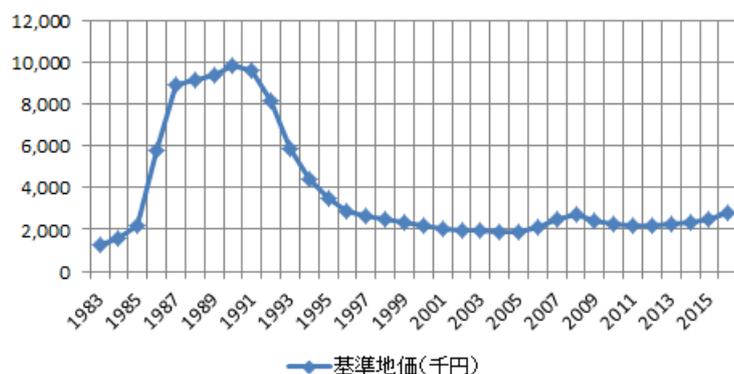
しかし、あとから気が付くことになるが、資産の時価は、1990(平成2)年春先がピークであった。1月には、大蔵省の通達があった。

4月にゴルフ場のインデックスがピークになった。

1953(昭和28)年	東京信用販売株設立。
1959(昭和44)年	東京信販ナショナルゴルフクラブ(TNGC)、ゴルフ場を持たないゴルフクラブ、発足、一時会員数3000名を超える。
1973(昭和48)年	東京信販レジャーライフクラブを発足(その後東京レジャーライフクラブ(略称TLC)に名称を変更)、募集を開始。ゴルフ会員の多数が東京レジャーライフクラブに入会。
1975(昭和50)年	4月ホテル伊東パウエルオープン91室。 6月沼尻パウエルオープン14室。
1973(昭和51)年	3月北軽井沢パウエルオープン24室。 4月パウエル山の中湖オープン10室。 11月ホテル天竜閣パウエルオープン20室。
1978(昭和53)年	7月中軽井沢パウエルオープン35室。
1979(昭和54)年	4月塩原パウエルオープン17室。
1980(昭和55)年	1月赤坂・新御堂・札幌オープン6室。 12月パウエル石打丸山オープン18室。
1985(昭和60)年	7月パウエル河口湖オープン3室。
1986(昭和61)年	8月ホテル箱根パウエルオープン34室。
1991(平成02)年	11月ホテル箱根パウエルアネックス26室。 オープン客室計 298室。

* 予想外の資産下落と預託金返還

都内地価



その後に資産の価格が下落が始まった。これは想像以上であった。バブルが崩壊して、退会者が増えても、バランス上はいいという自信があったが、しかし徐々にひっくり返った感じでビクビクし始めた。

退会者の預かり金の返済について可能な限り応じるとしたが、資金繰りが厳しくなった。この頃会員権は350万円。230万円が預託金、90万円が入会金であった。

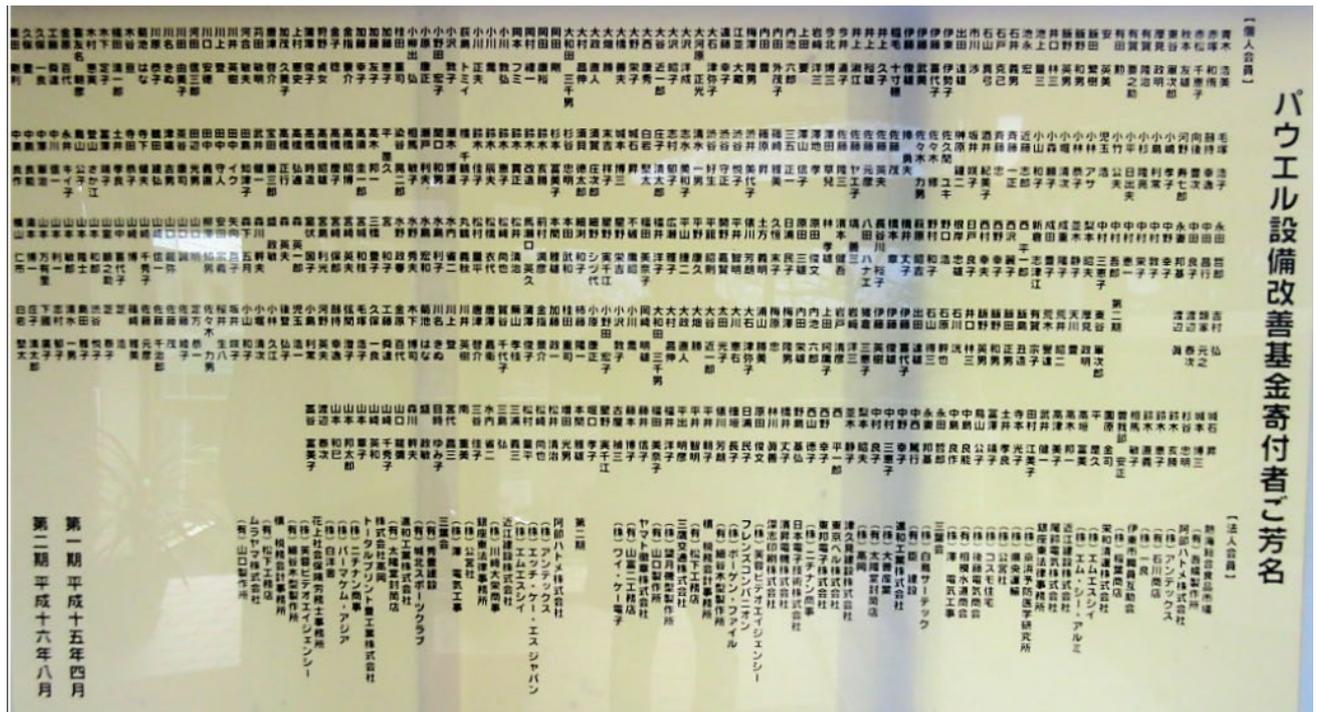
バブル崩壊後10年を経過、2000年前後から、ビジター(一般客)も入れた。歯を食い縛って運営してきた。ネット客が増えた。いまは60%近い。ゴールデンウィークや夏正月は会員だけである。高く売れる時期が会員だけなので、売り上げは上がらない。

2001~02年にかけて預託金の返還に応じられなくなってきた。230万円を2つに割って半分を保証金として10年間延長させ、残り半分は永久債として扱うことを考え、会員の70%が応じてくれた。会員歴の長い会員が多く、信頼関係ができていた。預託金の30%を返済するないしは50%を返済するという話し合いを続けた。

* 寄付を募って露天風呂

2003~4(平成15~16)年頃、伊東で露天風呂を作ろうとしたとき、資金がなかったため、会員との信頼関係に甘え協力を仰いだ。

3,000万円が集まった。箱根で本館とアネックスに段差があり、冬季は寒いので渡り廊下をつけようとしたとき、工事代金の半分を寄付してもらった。それぞれ、その銘板が掲示してある。



*** 民事再生法の申請**

2012(平成 24 年) 9 月 27 日、東京信用販売は横浜地方裁判所に民事再生法の適用申請を行った。
東京商工リサーチの調査によれば、

「ピークには年商 60 億円を計上」、「24 年 6 月期には 7 億円程度」、「1.1 億円の赤字」、「債務超過 7 億円程度」であったという。

収益減少要因として、「法人客数の落ち込み」「東日本大震災のキャンセル」を挙げており、「預託金返還の延長要請や、不採算ホテルの返還」などの事業リストラが効果を生むに至らなかったとコメントしている。

そして 10 月 11 日、横浜地裁は再生手続きの開始を決定した。

申請時の負債額は約 50 億円。

出典：東京商工リサーチ、20120928

http://www.tsr-net.co.jp/news/flash/1222104_1588.html

東京信用販売が運営する「東京レジャーライフクラブ」には評議員会がある。

民事再生法を申請するにあたって、評議員が一堂に会して、佐々木の報告に見耳を傾けた。

構成員には弁護士が 2 名おり、この機関は和気あいあいの任意組織であって、役員は自薦・他薦で就任しているという。

*** クラブ会員の事業継続要望**

続けてほしいという会員が多かった。

家族の歴史にこのクラブが刻み込まれているというコメントもあった。

歴史の長いクラブなので高齢者が多い。

いろいろな思いでもあるのか、お客は良いところだと言ってくれる。会員による頻繁な繰り返し利用には限界があるので、ビジター(一般利用)を進めている。

昔、会員だったので訪れてみたという人もいる。

このような事情から、民事再生を活用しつつホテルの運営を続けた。

民事再生法の処理を迅速に進めるためであろうか、東京信用販売の本社を静岡県伊東市に移転している。

* 再生法手続きが終結し、「東京レジャーライフクラブ」は大底を打った…？

民事再生法が適用されて3年。施設は伊東と箱根だけのコンパクトなリゾートクラブになった。

両施設とも眺望やアクセスは良好だが、客室数135。会員数は約700名、法人が100に減少した。

そして、2017(平成29)年1月に再生法手続き終結の決定が出た。

会員募集はやめていたが、今戻ってきている感じなのと、客室数に余裕があるので、会員募集を始めた。目標は1年で50口程度。

入会金20万円、年会費1.8万円(税込み2万円)の低価格会員制商品である。

会員権はまた少しずつ売れ始めている。掲記のような入会金と年会費である。

会員のメリットは、平日2,000円、土日4,000円、アネックスのお部屋を使う。そしてコミュニティーの参加ができる。

通年利用可能だが、たとえば、閑散期など、うまく空いていれば、数日ないし週間滞在には好適ではなかろうか。

「東京レジャーライフクラブ」の運営母体、東京信用販売(株)は、大底を打った…とみてよかろう。あたらしいスタートを模索している。

* 本稿者の感想

このクラブの名称は「東京レジャーライフクラブ」である。開業以来の名称で、創業者の頃から、変えていない。

「レジャー」という用語は、1973(昭和48)年あたりから、頻繁に使うようになる。72年に創設した通産省の外郭団体「余暇開発センター」が、73年に、レジャーを定義して、「人間の多様な生活活動のうち自由裁量に裏づけられた活動のすべてをさす」という。このセンターは、「財団法人自由時間デザイン協会」を経て、現在は、「公益財団法人日本生産性本部」が吸収し、その国際部に「余暇創研」があり、毎年『レジャー白書』を刊行する。

そのレジャーに「東京」という形容詞が付く。この「東京」とはなんだろうか。

江戸から維新、なお地価が高かったのは日本橋であって、銀座は新開地、丸の内は「三菱が原」であった。その原っぱにできた丸ビルこそ、日本の民間ホワイトカラー出現の象徴であった。ことに震災(1923年9月)以来、下町(例・日本所深川)からの大移動も加わり、中央線沿線から通勤する社員が丸の内と中央線沿線住宅地を成熟化させた。

本来の山の手(例:旧麹町区)とは異なるのだが、その次の世代のコミュニティのもつ雰囲気が残っている「リゾートクラブ」のような感じは、なにかしら郷愁を感じさせる。

そういう意味で貴重な存在ではなかろうかと。

【ホテル伊東パウエルの近況】

* 湯治と静養・人気の新井啓仁総支配人

年末年始やゴールデンウィーク、夏のお盆の時期などいわゆる「モノ日」はクラブ会員を優先する。よって一般のホテルのように売上を増やすことができない。クラブ会員とビジターの比率はおおよそ3対7。2016(平成28)年の年間宿泊数は3万6,000名。増加傾向にあった。

クラブ会員は高齢者が多く、すでにリタイヤされ、湯治客のようにゆっくり静養される。いまの会員が次の世代に続くことが望ましいけれども、価値観も相当に異なるので、そう簡単ではなからう。

伊東パウエルはゆっくり静かに静養できるところにある。館内にあるのはカラオケだけ。あとはこのホテルに隣接する市営プール程度である。カラオケには総支配人で取締役の新井啓仁がホストとして登場し、会員には人気がある。東京・浅草の出身だが、いくつかの伊東の旅館に勤務され、そのキャリアから、伊東の事情には詳しい。

伊東パウエルはオーシャンビューの眺望は売り物だが、もともと別荘をモデルにしたホテルコンドミニウム志向なので、特別なアトラクションや遊ぶための、遊興施設を備えている訳ではない。

館内に遊興施設を備えない、パブリックスペースを客室に振り替えるのが、ことに都市部のホテルコンドミニウムの特徴だ。したがって街を大切にす。アメリカのバケーションオーナーシップ(タイムシェア)の設計思想である。

かつてはこの考え方で設計されたホテルを「オールスイーツ」と呼んだこともある。

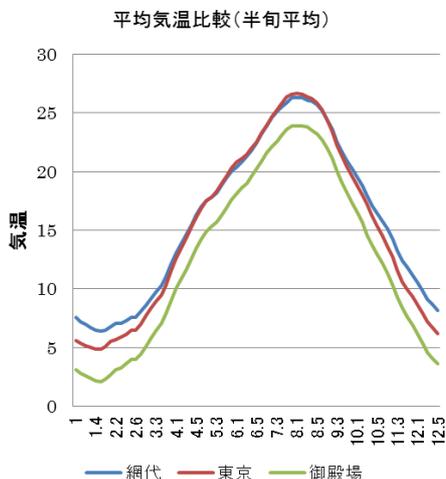
* 避寒…伊東と東京の最低気温比較

伊東パウエルの正月明けから2月平日は河津桜の時期まで閑散期である。河津は伊東から40キロ南、河津の桜祭りは2月10日から1か月程度設定している(河津町観光協会)。



左から大島桜・寒緋桜・河津桜。

河津桜は大島桜(伊豆諸島の海岸・山地に多く生育)と寒緋桜(中国南部から台湾に生育)の「雑種起源の園芸品種」らしく、昭和30年に河津で偶然発見され、その後、植樹で繁殖し現在に至っている。一般の桜(ソメイヨシノ)より桃・紅の色が濃く、早咲きである



アメダスでは伊東や箱根は気温の観測地点ではないので、網代(伊東より10キロ北、標高67m)と御殿場(御殿場市萩原、標高472m)の気温データを使う。網代・東京(北の丸公園、標高25m)・御殿場の半循環(ほぼ5日間)平均気温を比較してみる。夏季の網代と東京の気温は似たようなものだが、しかし、微妙に冬季は異なる。

(注) 半循環の平均気温とは、ほぼ5日間ごとに、5日間の平均気温を計算する。ひと月が30日とすれば、6回に分けて、それぞれ平均気温を計算する。年間12か月、ひとつき6回、しめて60にわけて平均気温の推移をみる。図の横軸に1とあるのは1月の最初の5日間、1.5とあるのは1月の5回目の5日間、2.4とあるのは2月

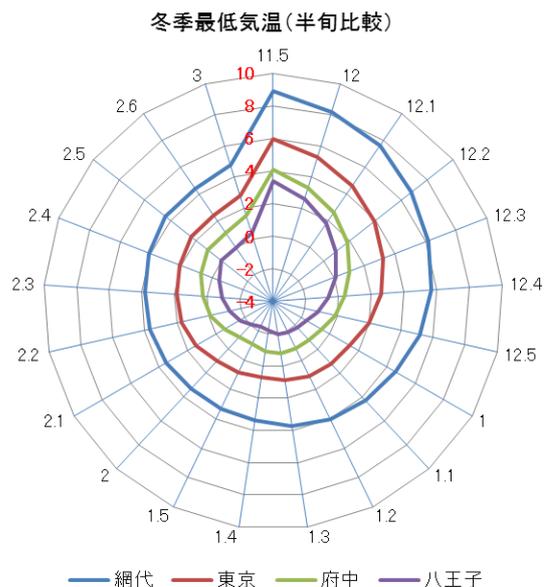
の4回目の5日間である。その年間の5日間の平均気温を、同じ時期の過去の観測値を抽出してさらに平均値を出す。たとえば網代の場合20年間分(1981～2010年)の観測値の平均である。いずれも気象庁アメダスの過去観測データである。

冬季(11月の最終半旬から3月の最始半旬までの約3か月)の日々の最低気温を、半旬(約5日程度ごと)の平均を求めて、網代、東京(前掲)・府中(府中市幸町、標高59m)および八王子(八王子市元本郷町、標高123m)と比較してみよう

円の外側の数字は月と半旬である。12は12月の第一半旬すなわち1日から5日、12.1は12月第二半旬すなわち6日から10日、以下同様である。もっとも

内側が八王子の最低気温の半旬平均である。外側に向かって、府中、東京(大手町)、網代と並ぶ。

網代の気温は東京の3つの地域とは異なる。伊東は暖かいといえよう。いまさらながらの指摘だが、東京からみれば、伊東は「近くの」避寒地に向いているのである。



* 仕事場としての活用

会員のなかには、パッチワークや物書きや著述に過ごす例もある。誰にもわずらわされることがないので、能率が上がると喜ぶメンバーもいる。筆者も試してみた。

年代モノ者風の家具昔、どこかで、に似たような経験をした。たしかにどこかで・・・と記憶を手繰ったら、東京・駿河台にあった「山の上ホテル・本館」の客室で、(客室あったカタログだと横浜ダニエル社製の桜材の家具)、机といす、スタンドがとてもデスクワークに向く。

おだてられて執筆活動をしたことを思い出した。

原稿で渡世する本職の作家が編集者に監視されながら、籠ったホテルとして、その筋には知られたホテルであった。



* 電車が意外な復活傾向

自家用車に代わって、電車でゆっくり訪れる傾向も出てきている。小田原と下田を走る食事付きの列車が企画されている。

まちをあげての集客企画も必要になる。臼杵(大分)・横須賀(神奈川)・平戸(長崎)などの都市と組んで、歴史ツーリズムや三浦安針(William Adams)を大河ドラマに仕立てる働きかけもしている模様である。

東海館や東郷平八郎、その他文人の別荘、吉田松陰の足跡、キリスト教徒のお墓もある寺院などを取り上げ、新味を出していく必要があるという。シャボテン公園のカピバラ(オニテンジクネズミ)も苦肉の策というべきか。いまの時代にはこの程度の企画力は要求されるようである。



【伊東パウエルからの観光地】

我々はリゾートという視点で、伊東にある伊東パウエルを観察してきたが、伊東はむかしからの観光地である。市街と全域の地図を例示したが、小さくて見えないであろうから、URL からダウンロードしていただきたい。リゾートは滞在なので、観光のように要所要所をめぐり歩くということを前提としない。仮に要所要所をめぐり歩くとしても、滞在地点からの往復をイメージする。



リゾートの施設は、必ずしもその館内に遊ぶ施設を public として持つことを予定しないので、仮に遊ぶとなれば、そのリゾートを構成する街に出かけることになる。

したがって、リゾートの滞在客は、滞在地とその周辺の状況については、好みに応じて熟知しておく必要がある。つまり滞在のプランを考えるときに、滞在地とその周辺の状況が計画の中身の材料になりうるからだ。また、滞在者の好み次第では、単なる材料を超えて、「研究」の対象になるかもしれない。

【伊東パウエルから徒歩で 4KM 程度】

伊東パウエル→01 松月院→02 伊東公園→03 湯の花通り・キネマ通り→04 東海館→05 松川遊歩道から「なぎさ公園」→06 伊藤オレンジビーチ→伊東パウエル

おおよそ左図のとおりである。例によって Google の計算では、3.3KM・43 分となった。各立ち寄りポイントでの時間を含めれば、半日くらいのコースになるかもしれない。2016(平成 28)年 12 月 12 日に、今泉が実際に歩いてみたので、その今泉の記録をもとに紹介する。

* 01: 松月院

伊東パウエルを出て伊東駅に向かう途中から右に曲がり、坂を上っていくとそこが松月院である。



この寺は 1183 年真言宗の寺として開創されたが 1607 年曹洞宗に転宗し名刹として知られている。本堂の左側には弁財天もある。高台にあるので眺望がよく、伊東温泉を海を含めて一望できるロケーションである。「桜寺」と呼ばれ、四季を通じて花の寺として有名だ。1 月半ばにはオオカンザクラや コヒガンザクラなど数種類の桜が目を楽しませてくれるそうだ。庭園も見事で、大きな鯉がゆったり泳いでいる池の周りに配された松やもみじ等とのコントラストが何とも言えず美しい。

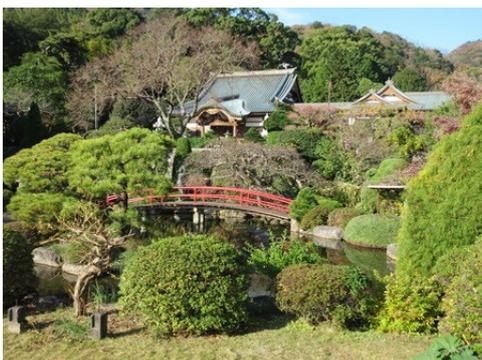
* 02: 伊東公園

松月院を出て駅の方に少し下ると伊東公園にぶつかる。何の変哲もない公園だと思って通り過ぎようとしたが、昇り階段が見え案内板によると展望台があるという。早速昇って展望台に行きつく。さすがに展望台だけあって、松月院より眺望がよく、伊東パウエルの建物もしっかり見える。せつかくなので、さらに上に昇ってみると小高い丘にたどり着く。

そこに医学者にして詩人、多彩な才能の木下杢太郎の記念碑がひっそり碑文とともに建っていた。

この公園は、ブランコや滑り台がある子供が遊べる公園だが、2 月頃にはオオカンザクラ、4 月には芝桜が咲き誇る公園だそうだ。

木下 杢太郎(きのした もくたろう、1885- 1945 年。本名は太田正雄。生家は東市湯川の雑貨問屋、現・木下杢太郎記念館。現・伊東市立西小学校から現・獨協中・高学を経て旧制一高・東大医卒。与 謝野鉄幹の『明星』同人。紀行文『五足の靴』を新聞連載など文才を発揮。本業は皮膚科学。南満医学堂教授兼奉天医院皮膚科部長、ソルボンヌ・サン・ルイ病院 (Hospital Saint-Louis) ・リヨン大学などに留学。愛知県立医専(現・名大医) ・東北大教授を歴任、東大皮膚科学講座教授。癩病の研究が有名。



* 03: 湯の花通り・キネマ通り



伊東駅に向かうが北側には出入口がないので、ガードをくぐり南側へ。ちょうどそこらが湯の花通りのようだ。何で湯の花通りと呼ばれるのか分からないが、狭い道にお土産屋さん、お菓子屋さん、飲食店などが並んでいる。

途中、きよろきよろ見回すと、お馬の湯や椿の湯といったモニュメントや可愛い七福神のイラスト等も現れて面白いが、あまり活気がない感じである。

その先、道路を横断すると道幅も広く立派なアーケードをそなえた商店街が現れる。地図で確認するとここがキネマ通りのようだ。で

も映画館も見当たらないし…。こちらの方が閑散としている。

* 04: 東海館

キネマ通りを抜けすこし進むと市内を流れる松川に架かる「いでゆ橋」に出る。そこから海の方面左河岸に異様な建物が見える。橋に案内板がある。それがかの有名な木造 3 階建ての温泉旅館「東海館」だという。

資料によると、東海館は、昭和 3 年(1928 年)創業しその後何回かの増築や改装を重ねながら旅館業を営んでいたが、平成 9 年(1997 年)約 70 年の歴史に幕を下ろした。その間、昭和 13 年に伊東線が開通するまでは湯治客で、開通後は団体客で賑わったという。その後、伊東温泉情緒を残す町並みとして保存の要望もあり、所有者から伊東市に寄贈された。

平成 11 年(1999 年)には、昭和初期の旅館建築の代表的建造物として文化財的価値を持ち、戦前からの温泉情緒を残す景観として保存し、後世に残す必要があるという理由から市の文化財に指定された。

さらに平成 13 年(2001 年)まで改修工事を行い、文化施設として開館し現在に至っているとのことである。



早速行ってみることとする。近くに行くと建物の大きさに圧倒される。木造 3 階建てとはこんなにも大きいものなのかと。それに玄関がまた凝っている。

鶴が唐破風造りの青銅色の屋根の下に綺麗に収まっている。入場し料金を払うと、ちょうど解説員が案内してくれる時間だという。それぞれの部屋が独立した形の入口である。

1 階: 書院造の部屋、障子と窓から見る景色が佳い。2 階: 展示室は、三浦按針(ウイリアム・アダムス)に関する資料等 NHK の連続ドラマにと訴求している。按針にゆかりの 4 市で ANJIN サミット(横須賀市・平戸市、臼

杵市)＝歴史ツーリズムを盛り立てようとする。さらに、伊東に関わりを持つ作家の資料 や、伊東出身の重岡健治の資料も展示している。3 階: 大広間、4 階: 望楼がある。



* 05: 松川遊歩道から「なぎさ公園」

松川を隔てた桜並木の遊歩道からの東海館。いろいろなモニュメントが点在。なぎさ公園には、重岡建治の「家族」をテーマにしたブロンズの作品10数点が点在し、海とその向こうに見える初島や半島の景色と相まって美しい。

* 06: 「なぎさ公園」から伊東オレンジビーチ経由伊東パウエルへ

海水浴シーズンではないのでビーチは閑散としている道路の反対側では、干物屋さんが軒を連ねている。

鰯の干物を干している。文字通り天日干し。小出刃を使ってエラ腹が取って背開きすれば、あとは洗濯物同様に軒先に吊るしておけばよい(蠅が飛んでくるので一工夫する)。

自分で食べるくらいの干物はこれではできるが、これはとてつもなくおいしい。



【伊東市郊外 50KM 程度】

ここから車で移動する。07 道の駅・伊東マリンタウン→08 城ヶ崎海岸→09 大室山→10 伊豆シャボテン公園→11 一碧湖。

* 07: 道の駅・伊東マリンタウン

伊東から網代寄りに向かうと海沿いに赤・青・黄色のカラフルな建物が見えてくる。

ここには、各種レストランや多彩なショップが入っているが、スパなどもある。

無料の足湯「あったまり〜な」もあるし、さらにユニークなのは「しあわせの黄色いトイレ」というものがある。広くて明るくてきれいなトイレで、多機能トイレや赤ちゃん用の授乳室まであるそうだ。

*08: 城ヶ崎海岸

さらに今度は伊豆半島東海岸を南下し伊豆高原駅近くの城ヶ崎海岸へ向かう。駐車場が整備されており行きやすい観光地である。

この海岸は、大室山が約4000年前に噴火し時に流れ出た溶岩が海に流れ、海の浸食作用で削られてできた溶岩岩石海岸で海岸線には絶壁が連なり、幾重にもふところ深く入り組んだ岩礁、岬から岬へと続く景観はまさに壮観だ。

・門脇灯台: 高さが地上約 25m・海上 40m以上で展望台はあるが、階段を歩いて登らなければならない。景色は、お天気さえよければ伊豆七島まで見える。

・門脇吊り橋: 高さが 23m・長さが 48mの吊り橋で、下を見ると足がすくむ。



*09: 大室山

また、伊東方面に戻り、伊豆ぐらんぱる公園の交差点を左折し、セラヴィリゾート泉郷のアンビエント伊豆高原の横を通り抜け、大室山に到着。

大室山は、約 4000 年前の噴火により粘り気の弱い溶岩のしづき（スコリア）や火山弾が加工の周囲に降り積もってできたそうで、標高 580mの山頂に直径 300mのすり鉢状の噴火口を持つ休火山。単性火山の典型例として、国の天然記念物に指定されている。

頂上には、リフトで上ることが可能だ。(往復 500 円) 頂上からの景色は360度相模湾から伊豆七島、富士山、天城連山等の大パノラマが見られる。また、噴火口を周回する約 1kmのお鉢めぐりは人気がある。毎年 2 月中旬に行われる山焼きは有名なイベントになっている。

*10: 伊豆シャボテン公園

時間もないので、パンフレットのみいただいたが、スタッフからカピバラの露天風呂入浴が見られる



とのお誘いを受けたが、入園料が2300円もするので、今回は断念した。

<http://ito-marinetown.co.jp/izu-9377.html>

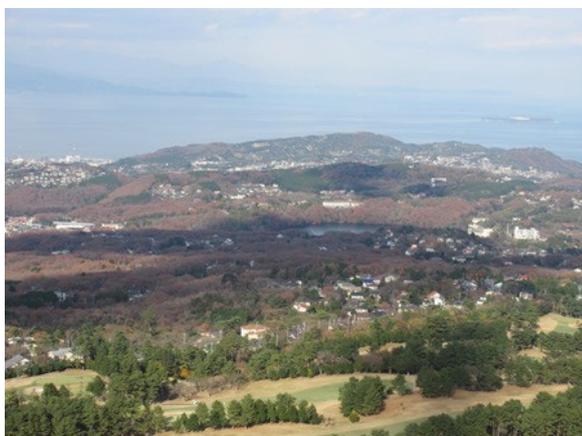
*11：一碧湖

大室山駐車場から一気に下り、一碧湖へ。ウィークデーのせいか静かで人っ子一人いない。車を駐車場に止め、遊歩道を歩く。足音を聞きつけて大きな錦鯉が寄ってくる。「伊豆の瞳」と呼ばれている。

ばれている。

しかし、いうほど美を感じなかったのは、時間がなく急いだゆえである。

やはり、駆け足はリゾートに似合わない。



*番外：寒冷地駅の伊豆箱根キャンペーンと小田原駅前の券売機

左は北陸新幹線のある駅構内、1月31日の画像である。何ら変わり映えのない、いつもある、旅行リーフレットのスタンドだ。この駅の周辺の桜の開花は、4月2週から3週。川



津桜は2月上旬。やはりながしか説得力はあるのだろう。

右の画像は「切符屋」の自販機。JR小田原駅前の路面店舗の店頭に設置されている。



小田急線と、JR新幹線・東海道線が並ぶ。

伊豆箱根は北陸新幹線のある駅からは「旅行」だが、東京・横浜からはがんばれば「通勤圏」の感覚である。リゾート定義のひとつである、「たびたび訪れる」には相応しいサイトとなろう。小田原から箱根にある前掲した年代モノの「著名別荘群」はその先駆的な存在ともいえよう。